

田沼肇先生の研究業績について

嶺, 学

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

40

(号 / Number)

1-2

(開始ページ / Start Page)

16

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

1993-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018680>

田沼 肇先生の研究業績について

田沼 肇先生の業績は、一九八六年に先生が還暦を迎えられたときに田沼（現在、五十嵐）明子さんが作成した『田沼 肇執筆目録』や、昨年、私たちが行った学術情報センターへの報告（これは主要なものに限られている）にまとめられている。

『執筆目録』は、一〇に分類されており、後に紹介する四分類以外では、「労働運動論」「原爆被爆者問題」「平和・原水爆禁止運動」「大学・研究者・学生論」「時評など」および「身辺断章」がある。分類が示すように、先生は、単に書斎の人であるにとどまらず、原爆被爆者の援護をはじめ、社会的な活動に携わってこられた方である。特に原爆被爆者問題についてはよく知られており、七一年に新日本出版社から単行書も出されている。

『執筆目録』を見ると、先生の研究のスタイルについてうかがわれることが二つある。第一に、極めて精力的に仕事をされてきたことである。『執筆目録』はA4版で、一ページに一五から二〇位論文などがリストアップされているが、研究的な色彩のある部分のみで約四〇ページに及んでいる。第二に、単行書としては、編著、共著が多い。他の研究者と共同、協力して、リーダーまた論客として執筆してこられ、また、共同研究を通じて若い研究者を育ててこられた状況がリストから浮びあがる。しかし、共同作業のなかでも、先生独自の理論展開などをされてきたことは後述のところからうかがわれる。

以下、私が扱いうる分野について、先生の業績を紹介する。記憶に残っているものや、容易に入手できるものに基

づくので、紹介の視点とともに偏りがあるかも知れない。

一 調査統計論

「世論調査と科学」『思想』一九五二年四月は、世論調査が科学的な装いで盛行し始めるなかで、生き生きとした歴史のエピソードを交えつつ、世論調査の諸問題の具体的検討（主体、調査者、質問の方法、誘導的な性格、非標本誤差、「わからない」や無答の重要性）を行った論文である。これにより、理論が先行すべきこと、世論調査が闘争の手段たりうることを示した。

有沢広巳編『統計学の対象と方法——ソビエト統計学論争の紹介と検討』（日本評論新社、一九五六年）は、副題の示すように、ソビエトで一九四〇年代末から始まり五四年に一応の結論に達した統計学の論争を紹介するとともに検討したものである。共同研究者のグループは、上杉正一郎（一九五一年）が提起した、数字は社会的、階級的産物であるとの趣旨の発言をうけて、ソビエトでの論争を止めさせたが、この中で、田沼 肇先生は序章、論争経過、むすびという要めの部分を担当した。先生は、（社会）統計学においては、数学の利用ではなく、政府統計調査の性格の批判と批判的利用が学問内容となること、その批判も経済学からでなく、統計学独自に行われるべきことを論じている。

「社会科学の方法と社会調査の方法」『思想』一九五八年二月は、福武直『社会調査』の書評であるが、この著作の貢献を明らかにする一方、その評価、批判を通じて、積極的に自説を展開している。特に中心的と思われるのは、社会調査の企画実施以前に理論が先行すべきことについては福武氏と一致するが、人が人に働きかけることにより生じる社会的事実を取扱う社会科学は、それを欠く自然科学と同一ではないと主張している点である。この主張の背後には、階級的な視点、数理統計の社会現象への安易な適用を批判する視点がある。なお、教育のあり方に関しても、

統計を数学の中に位置づけることを批判された。

一九七六年に経済統計学会が『統計』で「社会科学としての統計学」の特集を行った。これは社会統計の研究者たちのそれまでの研究成果をまとめる意義をもつ企画であったようであるが、田沼 肇先生はこれの中で「労働統計」を担当した。そして、源泉における歪み、労働統計が階級闘争に役立つようではなく国民経済計算のため用いられる傾向を指摘されたほか、統計の歴史の検討が重要であること、政府統計の批判から批判的利用への展開を示唆し、この視点において労働組合としても利用できることなどを論じられた。

以上、統計学、社会調査論において、マルクス主義の社会科学としての立場における研究者として、具体的な問題とともに、今日でも問題となる基礎的な方法論上の問題を論じられ、特に統計学独自の分野の確立を説かれた。また、福武氏の書評にみられるように、みずからの立場を失うことなく、自己批判的に相手の主張の積極的な要素を受けとめる姿勢をとってこられたことは、紹介した文献の書かれた時期を考慮すると、注目に値するであろう。

二 階級構成論

マルクス主義においては、階級構成とその動態に特別の関心がある。しかし、新旧中間層が階級対立を緩和すると
の常識もあり、また、最近、新中間層が増大する傾向もあって、これをいかに把握するかは、重要な研究課題である。
田沼 肇先生が階級構成論のなかで特に中間層の問題を扱われたのは、以上の事情によると推測される。

松成義衛等との共著『日本のサラリーマン』（青木書店、一九五七年）は、早い時期に、成長しつつある中間層であるサラリーマンの概観（その歴史、現状、米ソの状況）を行っている。田沼 肇先生は、歴史のうち昭和の時期を、特に敗戦以前を中心に概観している。また、その構成をスケッチしている。これにより、歴史、状態、運動などの基

本を知ることが出来る。

田沼 肇編『現代の中間階級』（大月書店、一九五八年）は、*Economie et Politique* 誌その他から、フランス、ドイツ、アメリカの新旧中間階級に関する論文などを、翻訳編集したものである。序章で、中間階級論を展開し、編者としての意図を明らかにしている。これによれば、中間階級の状態については、敗戦前に日本のマルクス主義者が論じたように地位悪化を不可避とみる見解や、これと対照的に、ホワイトカラーの増大と富裕化を説く説があるものの、中間階級の主要部分は意識の面とはうらはらに、資本主義の全般的危機とともに客観的にはその地位が低下し、賃金労働者化すると見なされる。

先生は、さらに階級構成を実際の統計により把握し、その状態や動向を分析しようとされた。まず、「都市中間層の存在条件」『経済評論』一九五九年八月では、都市中間層を国勢調査を用いて算定し、その内訳について論じた。この論文では、都市中間層はブルジョアの意識をもつが、他方、客観的には不安定性をもった存在であると指摘している。「国勢調査からみた階級構成の特徴」『経済評論』一九六七年九月では、六五年の国勢調査を組替え、以前からの変化がどのようなものであるか明らかにしている。特に中間階級の内容として、手工業者や小商業従事者が減少し、主婦内職層が増えるといった変化を指摘した。先生は、これらの分析の意義について、階級分析としては、理論と統計をつなげることに、このようにして把握された階級・階層がどのような運動法則に支配されているか明らかにすることが課題であるとされている。

中間階級論を中心とする階級構造論では、マルクス主義の基本的関心事であるこの主題を、統計とつなぐ努力をされたこと、いかなる立場であれ、中間層、ホワイトカラーの問題を検討しようとするとき参照すべき先駆的な文献をまとめられたことは永く記憶されるであろう。

三 社会政策・労働問題一般

『執筆目録』のこの分類には一二八の文献がリストアップされている。書評をしばしば行われ、また、広く問題を扱われたが、執筆時期とともに関心がある程度移行しているようである。労働者状態、合理化と失業、職業訓練、婦人労働などである。そこで、この分類の著作のごく一部になるが、個人的に強い印象をもっている三つの文献だけを紹介する。

ひとつは、大原社会問題研究所編『太平洋戦争下の労働者状態』（東洋経済新報、一九六四年）のなかの「戦時における労働強化と労働災害」である。この本は、大原社会問題研究所の『日本労働年鑑』の戦時中欠けていた部分をまとめて、この時期に編集したものであった。これが出版された頃には、この時代の労働についてまとめたものがほとんどなかったから貴重であった。田沼先生は、戦時下の労働の実態を、個別の労働組合運動史などによりながら記述し、鉦山部分では——最近注目されるようになったが——朝鮮半島、中国から連行され強制労働させられていた労働者についても見落とさず、客観的に言及されている。

つぎは、田沼 肇編著『現代の婦人論』（大月書店、一九七五年）である。先生が序論にあたるところを書き、以下五人が分担している。はしがきによれば、国際婦人年などにあたり科学的社会主義の立場に立つ婦人論を確立すること、婦人解放のため理論の前進に寄与することにあつた。「序論」では、先生自身も論争の当事者になられた、戦後の日本の婦人論の論争の大きな流れをまとめ、また、マルクス主義の婦人論を再吟味し、現代日本の各種婦人層とその運動を踏まえて、婦人解放の課題を明らかにしようとした。国家独占資本主義の支配により労働者である婦人はもちろん、主婦を含む各層の問題が生じ、それぞれの運動が起こっているが、それらが労働組合運動を基軸として合流

する道筋が描かれており、広い展望にたった論文と考えられる。

第三は、田沼 肇他編『現代の労働政策』大月書店、一九八一年である。この本は、国公労連の加盟組合である全労働の呼掛けと援助による研究会の成果とされている。全体からみてこの本の編集は、先生の指導によるところが大きいであろうと推測されるが、その基本的考えかたは、国家独占資本主義のもとで形成される相対的過剰人口を経済成長に利用する積極的労働政策——OECD諸国で追求されている——として、労働政策をとらえるものである。先生は、この本の序論的な部分を共同執筆されるとともに、国連の女子差別撤廃条約の労働領域について論じられた。この条約については八〇年に署名式があり日本も署名したが、当時では内容について検討した論文はあまりなかったと記憶する。検討の内容としては、母性保護をこれを機会に廃止する動きに注意を喚起していることが目立った。この本は、上記のような理論で一貫し、また専門労働者の参加をえて専門的・包括的である。そのため、伝統的には社会政策の主要部分とされてきた現代の労働政策について検討する際には、立場のいかんを問わず参照の労をいとうことが出来ない作品であると考えられる。

四 労働運動史

塩田庄兵衛、中林賢二郎両氏と共著の『戦後労働組合運動の歴史』新日本社、一九七〇年はコンパクトにまとめられた新書で、学生や労働者に広く読まれてきたようである。田沼 肇先生は、このうち、サンフランシスコ体制への移行期から六〇年安保までを担当された。

個別の労働組合運動史の編集などにもいくつか参与されたり、その他の著作もあるが、以下、社会政策学会の年報に収録されている二つの論文を紹介したい。

「戦後労働運動史研究における若干の論点」『戦後の日本の労働組合——社会政策学会年報第四集』一九五六年一

〇月は、『日本資本主義講座 第七巻 戦後労働運動史』を批判しつつ、日本の労働組合運動史の研究上配慮すべき視点と研究課題について論じている。すなわち、しばしば難問となってきた絶対的窮乏化について、これを実質賃金などが向上しているなかでの資本の対応としてとらえるべきこと、労働運動を階級闘争とみるならば、客観的条件や政策的反動の背後に資本の側の弱さがあるはずであることを指摘された。また階級闘争という視点からすれば、労働者階級内部の動向、組合組織の拡大と統一、組合員の意識レベル、時期区分などが研究課題となるべきであるとされた。

「時期区分の課題」『戦後労働運動の展開過程——社会政策学会年報第一五集』一九六八年四月。これは、塩田庄兵衛氏の報告へのコメントとして書かれたものである。言うまでもなく歴史を理解するには時期区分が不可欠であるが、それは何を基準とすべきかが問題である。先生は、資本主義の発展段階と労働運動の主体の側を統一的に、とくに後者を重視して時期区分すべきであると主張されている。労働運動を階級闘争と見なすならば、その主体側の条件が重要であることによると思われる。

この分野でも、多数の著作があり、印象に残ったものについて述べたにとどまるが、マルクス主義においては欠かす事のできないポイントを的確に指摘され、時期区分にしても見過ごすことのできない視点をもたれたといえよう。

バランスのとれた紹介になっていないことを恐れるが、以上の検討だけでも、田沼 肇先生の研究業績の特徴をつぎのようにまとめることができるであろう。

第一に、それぞれの分野で、研究史上忘れることのできない論文を書かれてきたことである。各分野の末尾にふれておいた通りである。

第二に、大きく目配りの利いた対象の把握をされていることである。この目配りは、先生が、各所において、歴史の重要性を指摘されていること、また、マルクス主義の古典に帰り、理論的な吟味をおこなっておられることと関係がある。この目配りによりバランスのとれた、永続性のある、説得的な論理展開が可能となったように思われる。

第三に、田沼 肇先生はマルクス主義に確固として立ち、マルクス主義以外の論者を批判しつつも、そこに積極的なものがあれば評価し、自己の立場を検証して行く態度をとられたと思われる。マルクス主義内の論争でも同様である。このような、広い、開かれた姿勢は、教条主義の対極であり、研究者としての初めからのものである。

第四に先見性をあげることが出来よう。古くは世論調査批判、近くは婦人論と国連条約など、いずれも他の人びとに先立って取上げ、論じられた。また、紹介する余裕がなかったが、「中小企業の民主的発展と労働組合運動」『中小企業における労働組合——現代の労働組合運動 8』大月書店、一九七八年では、国会で論議があったとはいえ、かんばん方式を批判しておられる。ごく最近になって論議が盛んになった主題であることを考えると、時代に先行して問題を指摘されていたことになる。

(一九九三年二月 嶺 学)